

核酸の歴史

The history of the nucleic acid

1869年、スイスの生化学者ミーシェルが患者の包帯から膿を集め、白血球 [※1] の中に含まれる高分子物質を細胞核 [※2] の中から取り出しました。その後、動植物全ての細胞（特にその核）に含まれる高分子有機化合物で、酸性を示すことから1889年「核酸」と名づけられ、以後、遺伝的性質に関与する物質として研究されました。1929年、フィーバス・レヴィーンがDNAを構成する糖はデオキシリボースとし、核酸にはDNAとRNAの2種類が存在することを発見しました。

1953年にはJ・ワトソン（米国）とF・クリック（英国）がその分子構造を明らかにして、1962年にノーベル生理・医学賞を受賞しています。この頃からアメリカではヘルスフードへの応用が模索されはじめ、1976年にはアメリカの開業医B・フランクが臨床経験を踏まえて、核酸を多く含む食品の摂取が有益であることを発表して話題をさらいました。

以降、現在に至るまで多くの研究が重ねられ、健康食品、化粧品など多くの製品に活用され、定番的な原料の一つとして広く流通しています。

[※1：白血球とは、血液に含まれる細胞のひとつです。体内に侵入したウイルスや細菌などの異物を排除する役割があります。]

[※2：細胞核とは、細胞の中心にあり、球状の形をしている組織で、遺伝情報を持つDNAが存在する場所です。]